

コロナの起源 コメント

キャノングローバル戦略研究所 研究主幹 杉山大志



世界有数のウイルス研究所から

- 流出（大事件）？
- 目の前で偶然パンデミック発生（大恥）？

疑惑の流れ



2001～2019年

2020年

2021～2026年

研究の拡大政策

9.11・炭疽菌事件後、米国は危険ウイルス研究を増強。機能獲得研究や、武漢を含むSARS様ウイルス研究にも資金を投じた。

私的疑念と公的断定

研究者は私信で研究所流出を疑いながら、対外的には自然起源を強く主張。Proximal Origin論文が世論形成に大きな役割を果たした。

新資料と説明責任

DEFUSE計画、内部通信、CIA内部メール・内部告発が公表される。ファウチ氏による科学的議論と情報分析への影響は大きかった

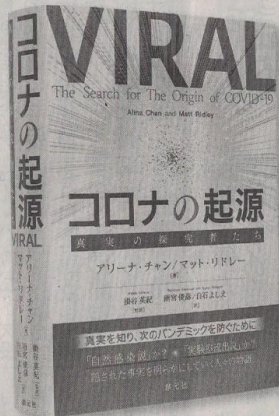
Sigrid Bratlie, 'The Fauci Case is About More than One Man,' invited guest post in Roger Pielke Jr., The Honest Broker, 17 Aug 2026.

コロナの起源

真実の探究者たち

アリーナ・チャン、マット・リドレー 著
掛谷 英紀 監訳
雨宮 俊彦、白石 よしえ 訳

◆創元社 (3850円)



大流行が始まった武漢には、ウイルス研究で著名な研究所があった。そこからウイルスが漏れた可能性は当然に疑われた。しかし自然起源説を中国当局とWHOは唱えた。メイנסトリームのウイルス学者たちは連名の論文を著名雑誌に書いてそれを支持した。研究所起源説は陰謀論であり偽情報であるとされた。

だが自然起源説にはすぐに問題が生じた。感染を媒介した動物も祖先となるウイルスも特定できないのだ。疑問を持った一部の研究者、そして在野の素人たちは、義憤と好奇心に駆られた。インターネットを通じて知り合い、情報を分析し交換しながら、次々に研究所起源説を支持する証拠を見つけた。いった。

そこで知り合った共著者のチャンとリドレーは、一度も直接会うことなくこの本を仕上げた。

2012年、中国雲南省の銅山で6人が発症し3人が死亡した事故から採取されたウイルスは、コロナウイルスに酷似していた。だがこのウイルスの存在そのものが中国当局によって隠蔽される。

ウイルスは武漢の研究所に保管されていた。この研究所は、これ以外にも、パンデミック予防研究のためとして、あらゆるウイルスの収集をしていた。のみならず、ウイルスの感染力を強める機能獲得実験も行わ

本棚から一冊

コロナは研究所起源なのか

紹介する人

杉山 大志

キャノン
グローバル戦略
研究所
研究主幹



このような実験が本当に役に立つのか、むしろ危険を招くのではないか、という疑念は絶えず提起されていた。実際にモフラリアムとされた時期もあった。だが結局、米国の国立衛生研究所NIHが資金を出し、米中の共同で研究は進められた。

次々と挙がる証拠に加えて、ついに極めつけの情報が発見される。不採択にはなったものの、コロナウイルスの感染力を遺伝子編集によって高めるといふ、そのものずばりの研究計画が大流行前年の2018年に申請されていた。

研究所起源説は、今や欧米では堂々と論じられるようになった。ただし今なお、中国は認めておらず、日本でも異端扱いである。

私にはこれが地球温暖化問題と重なる。公的な権威は気候危機説なる仮説に固まる。それを覆うとするのは、独立の研究者のネットワークである。証拠が積み上がるとゆつくりと世論も動くが、公的な権威はなかなか崩れない。

著者のリドレーは一流の科学者であり作家である。込み入った話を、読ませる物語に書き上げていて、ぐいぐいと引き込まれる。